看護婦と看護職のイメージに影響を及ぼす諸要因

川崎医療短期大学　第二看護科

林　喜美子　　松本　明美　　姫井富貴子

（平成２年８月27日受理）

The Influence of Various Factors on the Student Nurses to the Image of Nurse and Nursing

Kimiko HAYASHI, Akemi MATSUMOTO and Fukiko HIMEI

Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki, Okayama 701-01, Japan
(Received on Aug. 27, 1990)

Key words：看護婦，看護職，イメージ，要因

概　　要

看護婦に対するイメージ（看護婦イメージ）と，看護職に関する職業イメージ（職業イメージ）に影響する諸種要因についてアンケートの回答を基に，多変量解析法を使って検討した。

因子分析によって，看護婦イメージは肯定度の高い順に「仕事の大変さ」，「知的専門性」，「やさしさ・あたたかさ」の３因子に，職業イメージは「職業としての安定性」，「仕事のやりがい」の２因子に要約された。

「科，学年」はいずれのイメージにも強くかかわっており，課程別の特徴と，教育の進度による変化があることがわかった。

また，現在の進路選択について満足している者とそうでない者とでは，看護婦イメージを構成する３因子にも，職業イメージを構成する２因子にも大きな違いがあることがわかった。

得られた成績から，看護職への適性を高めていく教育のあり方を検討する必要に気付かされた。

Ⅰ．はじめに

現代の日本の社会と教育制度は，青年期のアイデンティティ確立を遅らせ，このことが職業選択を困難にしている一つの要因ともいわれている。

看護科の学生は，看護職に就くことを目指した教育を受ける。個人の才能や性質をうまくかみ合わせて職業を選ぶことは容易ではないが，専門職を養成する課程では，適性を高めていく教育を指向することが大事である。

本報は，看護科の学生が看護婦に対して，また看護職に関して抱いているイメージを知り，それらにどのような要因がどう影響を及ぼしているかを明らかにして，今後の教育実践に役立てたいと考えた。

Ⅱ．方　　法

１．調査項目及び方法

看護婦に対するイメージ（以下看護婦イメージと略す）および看護職に関する職業イメージ（以下職業イメージと略す），それらに影響を及ぼすと考えられる要因について，留置法によるアンケートを1990年６月25～29日の間に行った。看護婦イメージとしては表１に示す20項目を，職業イメージとしては表２に示す20項目を取り上げ，①全く当てはまらない，②当てはまらない，③どちらともいえない，④当てはまる，⑤非常に当てはまる，の５段階評定による回答を求め，それぞれの回答に１，２，３，４，５の

得点を配した。

看護婦イメージに影響を及ぼすと考えられる要因としては，表3に示した7アイテムとカテゴリーを取り上げた。このうちI6，I7の職業イメージにかかわる2アイテムは後述の職業イメージの因子分析の結果によるものである。

職業イメージに影響を及ぼすと考えられる要因としては，I1～I5の5アイテムとカテゴリーを取り上げた。

表1　看護婦イメージ

Q 1	：	美し い
Q 2	：	冷た い
Q 3	：	重労 働
Q 4	：	体力がある
Q 5	：	判断力がある
Q 6	：	かわいい
Q 7	：	冷静な
Q 8	：	忙しい
Q 9	：	科学的な
Q 10	：	頭がよい
Q 11	：	大変な
Q 12	：	気がきつい
Q 13	：	責任感がある
Q 14	：	素敵な
Q 15	：	やさしい
Q 16	：	健康な
Q 17	：	笑顔の
Q 18	：	意地悪な
Q 19	：	あたたかい
Q 20	：	知識がある

表2　職業イメージ

Q 1	：	資格がとれる
Q 2	：	収入が多い
Q 3	：	人のためになる
Q 4	：	興味がある
Q 5	：	聖職
Q 6	：	安定した職業
Q 7	：	自己の性格にあっている
Q 8	：	学習したことが生かせる
Q 9	：	研究活動ができる
Q 10	：	専門的な仕事
Q 11	：	自己の学力にあっている
Q 12	：	責任感のある仕事
Q 13	：	一生続けられる
Q 14	：	高い地位につける
Q 15	：	人の世話ができる
Q 16	：	自立できる
Q 17	：	社会に貢献できる
Q 18	：	器械相手でない
Q 19	：	離職しても再就職できる
Q 20	：	将来性がある

2．調査対象

第一看護科（1N）157人と第二看護科（2N）106人で，回収率は100％である。

3．統計学的解析

多変量解析には，因子分析法及び数量化理論第一類を適用した。因子分析には主因子法（ヤコビ法）・バリマックス回転法を，因子スコアーの算出は真の因子スコアーの最小二乗推定値による方法を用いた。抽出因子数は固有値が1.0以上を基準にして決定した。また平均値の差の検定には，t検定を用いた。

III．結　　果

1．看護婦イメージの構造

看護婦イメージとして取り上げた20項目の質問の回答得点を基に因子分析を行った。因子の解釈は因子負荷量0.4以上の項目の内容を中心に行った。各因子を特徴づける質問項目および因子負荷量を表4に示す。抽出された因子は3因子である。第一因子は「やさしさ・あたたかさ」，第二因子は「仕事の大変さ」，第三因子は「知的専門性」と解釈した。第一因子から第三因子まで，それぞれについて因子負荷量の大きい項目を合わせて1組とし，その回答の平均得点（負の因子負荷量を示した項目には，①，②，③，④，⑤の回答にそれぞれ5，4，3，2，1の

表3　要因アイテムとカテゴリー

要因アイテム	カテゴリー	人数
I1：科，学年	C1：1N1年	50
	C2：1N2年	55
	C3：1N3年	45
	C4：2N1年	52
	C5：2N2年	47
I2：受験時の進路選択状況	C1：看護職以外の進路も考えていた	72
	C2：看護職だけを考えていた	177
I3：家族，知人に看護職がいるか	C1：いる	140
	C2：いない	109
I4：自分の家族の入院経験の有無	C1：ある	215
	C2：ない	34
I5：現在の進路選択の評価	C1：看護職を選んでよかった	113
	C2：看護職を選んでよくなかった	22
	C3：わからない	114
I6：仕事のやりがい	C1：因子スコアー：>0.5	77
	C2：因子スコアー：−0.5～0.5	112
	C3：因子スコアー：<−0.5	60
I7：職業としての安定性	C1：因子スコアー：>0.5	72
	C2：因子スコアー：−0.5～0.5	111
	C3：因子スコアー：<−0.5	66

表4　看護婦イメージの因子負荷量

因子	質問	因子負荷量	固有値	累積寄与率(%)
第一因子「やさしさ・あたたかさ」	2．冷たい	−0.71	4.37	21.7
	12．気がきつい	−0.62		
	14．素敵な	0.49		
	15．やさしい	0.77		
	17．笑顔の	0.63		
	18．意地悪な	−0.57		
	19．あたたかい	0.73		
第二因子「仕事の大変さ」	3．重労働	0.60	2.03	31.9
	4．体力がある	0.49		
	8．忙しい	0.61		
	11．大変な	0.65		
第三因子「知的専門性」	1．美しい	0.46	1.24	38.0
	5．判断力がある	0.52		
	7．冷静な	0.44		
	9．科学的な	0.45		
	10．頭がよい	0.67		
	13．責任感がある	0.46		
	20．知識がある	0.52		

表5　看護婦イメージの因子別平均得

	例数	平均値±標準偏差	t 検定
第一因子	258	3.4±0.3	**
第二因子	258	4.7±0.4	**
第三因子	258	3.8±0.4	**

**：$p<0.01$

表6　職業イメージの因子負荷量

因子	質問	因子負荷量	固有値	累積寄与率(%)
第一因子「仕事のやりがい」	3．人のためになる	0.69	4.66	23.3
	4．興味がある	0.55		
	5．聖職	0.57		
	7．自己の性格にあっている	0.46		
	8．学習したことがいかせる	0.49		
	9．研究活動ができる	0.42		
	12．責任感のある仕事	0.47		
	15．人の世話ができる	0.70		
	17．社会に貢献できる	0.71		
	18．器械相手でない	0.42		
第二因子「職業としての安定性」	1．資格がとれる	0.46	1.81	32.4
	2．収入が多い	0.51		
	6．安定した職業	0.60		
	10．専門的な仕事	0.49		
	13．一生続けられる	0.53		
	14．高い地位につける	0.52		
	16．自立できる	0.51		
	19．離職しても再就職できる	0.61		
	20．将来性がある	0.62		

表7　職業イメージの因子別平均得点

	例数	平均値±標準偏差	t 検定
第一因子	258	3.8±0.5	**
第二因子	258	3.9±0.5	

**：$p<0.01$

得点を配した）を求めた成績を表5に示す。平均得点は第二因子で最も高く，第三因子がこれに次ぎ，第一因子で最も低い（$p<0.01$）。すなわち肯定的イメージの強さは「仕事の大変さ」で最も高く，「知的専門性」，「やさしさ・あたたかさ」の順である。

2．職業イメージの構造

職業イメージとして取り上げた20項目の質問の回答得点を基に因子分析を行った結果を表6に示す。因子分析によって2因子が抽出され，第一因子は「仕事のやりがい」，第二因子は「職業としての安定性」と解釈した。因子別に回答の平均得点を求めた成績を表7に示す。第二因子である「職業としての安定性」の意識がより肯定的であった（$p<0.01$）。

3．諸種要因の看護婦イメージに及ぼす影響

看護婦イメージとして取り上げた20項目および要因として取り上げた7アイテムのすべてに回答のあった249人（全回答者の94.7%）のデータを検討の対象として，看護婦イメージの因子分析によって求められた3因子の因子得点それぞれを外的基準とし，数量化理論第一類によって解析を行った。解析の結果は表8－1～8－3に示す。カテゴリー別の重み値は偏相関係数が比較的大きい値（0.1以上）を示した要因のみについて示した。因子得点は＋の絶対値が大き

表8－1　諸要因の看護婦イメージ　第1因子得点に及ぼす影響

要因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 1	C 1	0.55	0.37	0.83
	C 2	−0.22		
	C 3	−0.28		
	C 4	0.00		
	C 5	−0.07		
I 2	—	—	0.07	0.12
I 3	—	—	0.06	0.08
I 4	—	—	0.03	0.06
I 5	C 1	0.32	0.36	1.03
	C 2	−0.71		
	C 3	−0.18		
I 6	C 1	0.27	0.23	0.05
	C 2	−0.06		
	C 3	−0.23		
I 7	C 1	−0.08	0.10	0.16
	C 2	0.08		
	C 3	−0.05		

いほど肯定的イメージが強いことを示し，したがって＋の絶対値が大きい重み値のカテゴリーを属性とする者ほど肯定的イメージが強いといえる。

第一因子の「やさしさ・あたたかさ」のイメージにはI1，I5，I6，I7が影響を及ぼしている。I1の「科，学年」では，1N1年が最も肯定的で，学年が進むにつれ肯定度が下がってきている。2Nの場合は1・2年ともその中間に位置する。I5の「現在の進路選択の評価」では，よかったと評価している者の肯定度が高い。I6の「仕事のやりがい」の意識ではそれを強く肯定している者ほど，また，I7の「職業としての安定性」の意識では，それを強く肯定している者でも否定している者でも，「やさしさ・あたたかさ」の肯定度が低いことがみられる。

第二因子の「仕事の大変さ」ではI1，I2，I3，I5，I6，I7が影響を及ぼしている。「科，学年」では1N各学年ともに肯定的イメージが強く，かつ学年が進むに伴い肯定度が強くなっている。2Nはその逆で1・2年とも肯定度が低い。「受験時の進路選択状況」では「看護職だけを考えていた」と答えた者の方が肯定的である。「現在の進路選択の評価」では「看護職を選んでよかった」と答えた者の肯定度が低く，「よくなかった」と答えた者は重み値も0.7と大きく，仕事の大変さをより強く肯定している。「仕事のやりがい」および「職業としての安定性」の意識では，ともにそれを強く肯定している者で「仕事の大変さ」の肯定度が高い。

第三因子の「知的専門性」のイメージにはI1，I3，I6，I7が影響を及ぼしている。「科，学年」では1N2年，1N3年で肯定度が高く，1N1年で肯定度は最も低い。「仕事のやりがい」および「職業としての安定性」の意識では，上記の「仕事の大変さ」のイメージに対するのと同様である。

表8－2　諸要因の看護婦イメージ第2因子得点に及ぼす影響

要因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I1	C1	0.17	0.27	0.52
	C2	0.17		
	C3	0.22		
	C4	−0.26		
	C5	−0.30		
I2	C1	−0.17	0.13	0.23
	C2	0.07		
I3	C1	0.07	0.10	0.15
	C2	−0.09		
I4	—	—	0.06	0.12
I5	C1	−0.24	0.32	0.96
	C2	0.72		
	C3	0.09		
I6	C1	0.41	0.33	0.60
	C2	−0.19		
	C3	−0.18		
I7	C1	0.14	0.17	0.34
	C2	0.02		
	C3	−0.19		

表8－3　諸要因の看護婦イメージ第3因子得点に及ぼす影響

要因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I1	C1	−0.35	0.29	0.70
	C2	0.13		
	C3	−0.08		
	C4	−0.05		
	C5	0.35		
I2	—	—	0.05	0.07
I3	C1	−0.03	0.10	0.15
	C2	0.04		
I4	—	—	0.03	0.07
I5	—	—	0.07	0.12
I6	C1	0.48	0.40	0.83
	C2	−0.15		
	C3	−0.34		
I7	C1	0.22	0.25	0.51
	C2	0.03		
	C3	−0.29		

4．諸要因の職業イメージに及ぼす影響

前項と同一の249人のデータを対象として，職業イメージの因子分析によって求められた2因子それぞれの因子得点を外的基準とし，数量化理論第一類によって解析を行った。取り上げた要因アイテムは，前項のI1～I5と同様である。解析の結果を表9－1，9－2に示す。

第一因子の「仕事のやりがい」の意識にはI1とI5が影響を及ぼしている。I1の「科，学年」では，1N1年が最も肯定的で，学年が進むにつれ肯定度が下がってきている。逆に2Nの場合は2年生の肯定度が高い。I5の「現在の進路選択の評価」では，よかったと評価している者の

表9－1　諸要因の職業イメージ
第1因子得点に及ぼす影響

要因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 1	C 1 C 2 C 3 C 4 C 5	0.14 0.04 −0.10 −0.14 0.05	0.12	0.28
I 2	—	—	0.07	0.13
I 3	—	—	0.05	0.08
I 4	—	—	0.09	0.21
I 5	C 1 C 2 C 3	0.40 −0.66 −0.26	0.40	1.06

表9－2　諸要因の職業イメージ
第2因子得点に及ぼす影響

要因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 1	C 1 C 2 C 3 C 4 C 5	0.04 0.09 −0.29 0.05 0.08	0.15	0.38
I 2	—	—	0.02	0.05
I 3	—	—	0.09	0.16
I 4	—	—	0.01	0.03
I 5	—	—	0.06	0.13

肯定度が高い。

第二因子の「職業としての安定性」の意識にはI1のみが影響を及ぼしている。I1の「科，学年」では，1N2年，2N2年が肯定度が高く，1N3年の肯定度が最低である。

Ⅳ．考　　察

看護婦イメージと職業イメージに影響を及ぼしている要因についてみると，看護婦イメージと職業イメージの各因子全部に影響を及ぼしているのは「科，学年」である。次に多くの因子に影響を及ぼしているのは「現在の進路選択に対する評価」，「仕事のやりがい」，「職業としての安定性」である。逆にまったくどの因子にも影響を及ぼしていない要因は「入院経験の有無」である。

1）科，学年

最も影響の大きいアイテムである「科，学年」について課程別と学年による変化をみると，1Nは学年による変化が大きいが，2Nは看護婦イメージも職業イメージも，1，2年ともに同じような肯定度であり，学年の進行に伴う変化は少ない。2Nは准看護学校(13.1%)，高校衛生看護科（86.9%）の時代に病院実習の体験を通して，看護婦イメージや職業イメージが形成されていると考えられる。これに対して1Nは，人間的な「やさしさ・あたたかさ」のイメージが，仕事の厳しさや専門的知識，判断力に比べて，学年の進行に伴って肯定度の低下見られたが，それは入学後の授業と病院実習が影響していると考えられる。憧れ，眺めていた段階から現実の厳しさを直視した反応とも思えるが，教育を受けるにつれて看護婦に必要な優しさや温かさが失われていくのは寂しい。

我々が昨年までに行った，同一集団を入学から卒業までの間で，看護職に対する態度がどのように変化していくかをみた調査では，第1に1年次と2年次の間で最も大きく変化していた。第2に3年次と1年次を比較した場合，職業イメージの10項目すべてがマイナスに変化しているという結果が得られた。今回の調査でも学年の進行に伴い，看護婦イメージや職業イメージに変化があるということがわかったが，本報は1，2，3年別々の対象で調査したため，この結果が学年の特性なのか，教育計画，方法，指導を含めた影響なのかを多面的にそして継続的に調査していく必要がある。

2）現在の進路選択の評価

現在の進路選択の評価について，看護職を選んでよかったと評価している者は，「やさしさ・あたたかさ」，「仕事のやりがい」の肯定度が高く，よくなかったと評価している者は肯定度が低い。「仕事の大変さ」はよかったと評価している者だけが肯定度が低く，よくなかったと評価している者は，仕事は大変だと肯定している。

このことは，現在の進路選択についてよかったと評価をしている者は，看護婦の「仕事の大変さ」よりも「やさしさ・あたたかさ」，「仕事のやりがい」を強く感じ，それが現在の満足感につながっているといえる。

逆によくなかったと評価している者は，仕事

のやりがいよりも，大変さが強調されている。

看護職を選んでよかったかどうかわからないと答えている者の看護婦イメージと職業イメージの肯定度は，よかったと評価している者とよくなかったと評価している者の中間をとっている。

この評価は現時点のものであり，流動的であると考えられる。わからないとした者が45.8%と約半数を占めることからも揺れ動く学生の姿がうかがえる。

3）仕事のやりがい，職業としての安定性

「仕事のやりがい」を強く肯定している者は，看護婦イメージの3因子のすべての肯定度が高い。看護婦の仕事は忙しく，大変であるが，優しく温かく，知的な能力と判断力を持っていると感じている。ただ単に大変なばかりでなく，やりがい感を伴った大変さを感じていると受け取れる。

「職業としての安定性」を強く肯定している者は，看護婦イメージの3因子のうち「やさしさ・あたたかさ」の肯定度が低く，「仕事の大変さ」，「知的専門性」の肯定度が高い。

職業イメージのやりがいと安定性のどちらを重視しているかによって看護婦イメージの「やさしさ・あたたかさ」に違いが生じているのは興味深い。

4）入院経験の有無

自分や家族に入院経験があるという者が86.3%と多いにもかかわらず，その入院経験はまったくどの因子にも影響を及ぼしていない。このことは，入学後の看護婦イメージや職業イメージの変化には，入学前の入院経験で接触をもった看護婦からほとんど影響を受けないといえるようである。

V．結　　論

1．看護婦イメージは3因子に分類され，肯定度の高い順に「仕事のたいへんさ」，「知的専門性」，「やさしさ・あたたかさ」である。

2．職業イメージの構造は「職業としての安定性」，「仕事のやりがい」の2因子に要約され，この順に肯定度が高い。

3．看護婦イメージと職業イメージの各因子全部に影響している要因は「科，学年」である。1Nは学年の進行に伴うイメージの変化が大きく，2Nは1，2年で変化がなく，同じような肯定度である。入学時の背景の違いによる特徴と，教育の影響がみられた。

4．現在の進路選択の評価

現在の進路選択の評価の違いによって看護婦イメージと職業イメージの各因子の肯定度に違いがあることがわかった。約半数の者が自分の進路選択の評価に迷いを表現していることからも，適性を高めていける教育，指導の必要性を感じる。

謝　　辞

統計的処理や作成についても細部に渡ってご指導下さいました本学第一看護科の酒井恒美教授に深く感謝いたします。

文　　献

1）内田靖子，他：看護学生の看護職への適応過程に関する研究―入学時から卒業時に至る変容とその影響―，東海大学短期大学紀要，**15**，15～24（1981）

2）林喜美子，他：本学看護学生の看護職への態度に関する調査（第Ⅲ報），川崎医療短期大学紀要，**9**，67～74（1989）

3）我如古栄子，他：看護学生の看護婦としての自己能力の学年別による検討，第14回看護教育学会集録，299～303（1983）

4）藤原ヤスエ，他：看護婦像に関する調査，看護教育**41**(10)，624～633（1980）

5）床田弘子：看護学生の看護観形成についての一考察，第10回看護教育学会集録，83～87（1979）

6）芝田不二男：現代ナース論，医学書院（1973）

7）永田忠夫：看護婦という職業を選択した要因について，愛知県立看護短期大学紀要**13**号，65～75（1981）

8）小島禮子：看護学生の職業意識の形成に関する研究，看護研究，**1**（8），46～61（1975）